

10周年記念号によせて

学 長 佐 伯 弘 治

流通経済大学は、今年、創立十周年を迎えた。これを記念して本学の学術研究会は論集の特別号を出すことにした。もっとも記念論集といっても、とりわけあらたまった趣向があるわけではない。1966年9月の創刊号以来、毎年4回、確実に発行してきた「流通経済論集」の第36号（通巻）を記念号として、通常のそれよりやや多くの論文を収録したのである。

10年という時の経過は、大学の年輪としてはとりたてていう程のことではない。しかし、本学にとって、この10年は基礎固めの時期としてまことに意義深く、感なきを得ない歳月である。

本学の開学の年、1965年は、東京オリンピックの翌年であり、わが国経済の成長の足音が愈高まりをみせはじめたときであって、この前後に多くの大学が新設された。本学もまたその一つであったが、ただ、日本の大学成立史上、かつてなかったその設立の経緯に世間の関心が寄せられた。すなわち、明治以来、個人の篤志家の寄附によってできた高等教育機関は少なくないが、営利法人の直接の出捐によるものはその例がなかった。

流通経済大学は、日本通運株式会社が、財団法人小運送協会を通じて寄附した資金によってつくられた大学であり、このことが折から盛んであった産学協同論議とからめられて、学界や教育界の耳目をあつめたのである。そして今日に至るも本学に対する毀誉褒貶のすべてがこれに起因している。

たしかに学問と大学教育の産業への従属は厳に否定されなければならない。しかし、大学が生産する価値のうち最も貴重なものは知的創造力とか真理への愛といった、いわばすぐに金に

はならない無形の価値であるから、大学が自己の使命を果すためには国家や産業から資金の一方的提供を受けざるを得ない。特に私学の場合は、民間の篤志に依拠することを否定してはなりたない。要は、これによって大学のもつ客観性、あるいは自由が、聊かも失われてはならないということである。

われわれは、大学と産業界との関係を常にこのような次元でとらえてきたし、流通経済大学10年の歴史は、正にこの理念確立への歩みであったと自負している。とりわけ、その後半期にこの考え方が定着し、成熟をみたことについては、澤村貴義日本通運社長をはじめとする同社首脳部の見識に負うところが大きい。ここに記して永く大学の歴史にとどめたい。

また、流通経済大学という名称のもつ響きのせいか、10年の星霜を経た今もなお本学の内容に対する世の理解に、たとえば「すぐ役に立つ（実務教育）一受け。流通経済大学」（日本経済新聞、1975年10月14日付……本学卒業生の好就職状況を報じて……）といったような、必ずしも当を得ないものがある。研究と知的教育の府である大学として、経済現象としての流通の問題に科学的な関心をもつことを一つの大きな特色とはするが、決して流通に関する実務的な技能教育を施す機関ではない。したがって、研究面でも、応用研究が基礎面にフィード・バックすることもあり得るから、これを排除することはないが、あくまで基礎研究を中心としている。

ともあれ、今や大学の目的が一つであると考えられていた古典的な大学の時代は過ぎた。現代の大学の前提は価値観の多元性にある。そし

てそれは、一大学の中での多元性ということでもあり、かつ、それぞれに特色をもった多様な大学が多数社会に存在しなければならないということでもある。それゆえに今日では、建学者や設置者の一方的な意図によって大学の方向が、固定的、全体的に律せられるということもあり得ない。大学は、その構成員の合意によって導かれ、時代の息吹きを吸収しながら、独立の人格として、どこまでもひとり歩きするものでなければならない。かかる視点に立つとき、わが流通経済大学こそ正に現代の大学である。

ところで、10年の足跡の一つであるこの論集も、今号から「流通経済大学論集」と改題することにした。特に深い意味があるわけではないが、本学教授陣の研究発表誌としての性格上、経済学・経営学をはじめとする社会科学の論文はもとよりであるが、当然のことながら人文科学や自然科学に関する論文も数多く掲載される。この実体をより正確にあらわすには「流通経済大学論集」の方が適切ではないかとの声がかねてからあったので、この機会に改めることになったのである。

それにしても、この論集が、単一学部の、限られた陣容で、創刊以来一度も休むことなく続いたことは驚嘆に価する。この間、本学といえども泰平のときばかりではなかった。たとえば、日本中の大学が、その在り方を根本的に問い直すことを迫られたあの時期、あるいは本学に固有な運営上の改革問題などもあって、ほとんどの教員が研究の時間をみつけだすために苦労したこともある。しかし、そんなとき誰いうとなく「学問の灯火を絶やすな」という声が湧き上

った。いま過ぎし日を偲びながら、本学の教員諸氏の真摯な姿勢にあらためて敬意を表さざるを得ない。

また、それにつけて忘れることのできないのは、かつて本学教授として、この学術研究会の草創に尽され、あるいは論集に筆を執られた先学の方々である。今は亡き高木友三郎(世界経済論)、山村喬(経済政策)の両碩学、そして現役を退かれこそしたが、学界の耆宿として豊饒たる島田孝一(初代学長、交通経済論)、松好貞夫(初代経済学部長、日本経済史)、赤松保羅(心理学)、高橋秀雄(交通経済論)、工藤和馬(交通政策)、村瀬示路(英語学)、高木寿一(財政学)の諸先生であって、新しい大学に学問の気風を培われた事績は、本学の歴史とともに不朽である。さらにまた、この論集で業を競い、研鑽をともにしたなかから、東北大、早大、名古屋大、東京教育大その他の招聘によって本学を去られた諸君の数も十指をこえる。寂寥と遺憾の念を禁じ得ないところであるが、幸いこれに変わる俊秀が相ついでわが陣容に加わられたことは心強い。もっとも、このことも高い見地に立てば、わが学術研究会が、人材供給の面で聊か学界に貢献してきたということになるのかもしれない。そしてそれだけ流通経済大学の裾野が広がったということになるのであろう。

いずれにしてもこの論集は、流通経済大学における研究面の一つの柱である。創立10周年を記念するこの一巻を契機として、研究活動をますます振作し、一層、学問の興隆に資さなければならない。

(1975年11月)